

# 「なりきり詩」で、表現を工夫する

伊藤正統 | 広島大学附属三原小学校

## 1. はじめに

子どもは、理科で実際に昆虫に触れながら学び、昆虫に慣れ親しんでいる。そこで、昆虫を題材とした「なりきり詩」を読ませ、書かせることで、表現を工夫させるよう試みた。そうすることで、子どもが、表現を豊かにしていくことができると考えたからである。

## 2. 「なりきり詩」を読む

教科書（学校図書）に、「カブトムシ」だけを空欄にした原直道の詩『カブトムシ』が載っている。これを子どもと繰り返し音読した後、子どもに「空欄に当てはまる昆虫は何か」と尋ねる。子どもは簡単に「カブトムシ」と答えるので、「なぜ、カブトムシと思ったのか」と続けて尋ねる。すると、子どもは、「カブトムシ」と判断した根拠となる言葉を探し始める。ある子どもは、『夏の王様』と書いてあるから」と答える。また、ある子どもは『りっぱな角』と書いてあるから」と答える。そして、子どもは「夏の王様」、「りっぱな角」、「夜がすき」、「木のえきをたっぶりのんで」、「なかまとすもう」、「クワガタムシにはまけないぜ」という表現を見つけていく。

根拠となる表現が出揃ったら、「この中で決定づけたヒントはどれか」と尋ねる。子どもは、「クワガタムシにはまけないぜ」を挙げる。そうして、子どもは、カブトムシを表す数々の表現とともに、カブトムシと決定づける表現があることをとらえる。

次に、工藤直子の『のはらうた』から『おれはかまきり』を「かまきり」を伏せ、一連だけ板書して、見せる。そして「カブトムシ」と同様に順に尋ねる。

子どもは、「かまきり」を決定づける表現として「かま」を取り上げる。「昆虫で『かま』があるのは、かまきりだけだから」という理由からである。

## 3. 「なりきり詩」を書く

子どもに「昆虫になりきって詩を書くとしたら、何に気が付いたらよいか」と尋ねる。読む学習をしてきた子どもは、「昆虫がわかるヒントを入れること」、「昆虫がよくわかるヒントを一つ入れること」と答える。そこで、「決定づけるヒント」と「ヒント」を入れて詩を書かせる。

全員が書き終わったのを見計らって、昆虫名を伏せて、数人に発表させる。その上で、全体に「決定づけるヒントはあったか」と尋ねる。子どもは、「あった」と答える。次に、ペアで音読し合い、何の昆虫か当て合いをさせる。さらに、それをグループ、全体と広げ、自作の詩を交流し合わせる。

最後、子どもに「おすすめの詩はあったか」と尋ねる。子どもが、「○ ○さんの」と答えるので、その子どもに詩を紹介してもらい、「何の昆虫かわかるか」と尋ねる。

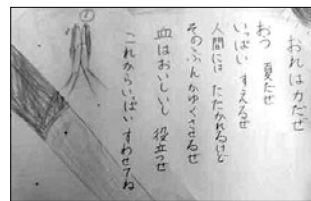


図1 子どもの作品

## 4. おわりに

授業後も自作の詩をもってきて、「ばくの詩のヒントはこれだよ」、「この詩どう？」と楽しそうに語る子どもの姿が見られた。「なりきり詩」を読んだり、書いたりすることを通して、子どもは主題に迫る表現の軽重のつけ方や表現の仕方を身につけることができた。